

# 長崎学の泰斗 中西 啓 先生を悼む

長崎大学医学部教授

相川 忠臣

鴨居を避けるように少し身をかがめて「やあ」と部屋に入って来られた先生とのお話は医史学に始まり医史学に終わるのが常でした。それは医史学しか興味のなさそうな私に合わせるの事でしょう。おそらく俳諧でのお付き合いでは俳諧で、書画でのお付き合いでは書画で、終始していたのでしょう。先生は医史学にとどまらず、哲学、芸術、宗教、博物学の広い分野に深い学識をもたれた方でした。その知らざることのない博覧強記の頭脳はかけがえのない長崎の宝でした。



シーボルト記念館で講演されている先生 (平成4年)

長年勤務されていた国立療養所長崎病院で手厚いご看護の甲斐も無く、平成十四年三月三日桃の節句に、先生は七十八歳で逝去されました。翌四日、長崎大学附属図書館医学分館で松本良順の取材に来ていた人に会い、良順の描いた雛人形の絵を取り出しながら得々と話していて、それが皆先生から教えていただいた事に気がつきました。その絵には安政庚申(一八六〇)重三の日付があります。桃の節句に養生所建設の起工を命ずるお達しが奉行所でなされました。良順先生は記念に雛人形をお書きになり、その同じ日に奇しくも江戸

では桜田門外で養生所建設を認めてくれた井伊大老が斬殺されたというお話でした。幽明界を異にしたはずの先生が私の傍にいて教えてくださったかのようでした。

先生は戦時中より杉浦正一郎博士（九州大学文学部教授）に師事され俳諧史の研究をされていました。その後佐賀大学文学部より長崎大学医学部専門課程に入学されました。先生が医学部を卒業された昭和三十二年（一九五七）はポンペ先生が松本良順を始め十二名の学生に講義を開始された一八五七年から丁度百年であります。当時の学長より長崎医学百年史執筆を依頼されたのは先生が医学部三年の時でした。以後五年余の歳月を懸けて先生の熱意と類まれなる調査力で長崎医学百年史は完成しました。その編集委員長であられた箴島四郎教授は県立図書館の寒い一室でオーバーにくるまりながら文献を渉猟する先生のお姿を見て感動し、只敬服の一語あるのみと書かれています。この本は今尚その価値を失わぬ不朽の労作であります。ご卒業後は箴島教授のお人柄を慕って箴島内科に入局されました。内科医としての人生が始まったのも医史学の研究は間断なく続けられ、日本医史学会の理事として、長崎学の権威として史学界の重鎮でした。岩波新書で好評となり特装版として再出版された『長崎のオランダ医たち』を始め、『世界史の中の長崎』や『シーボルト評伝』等多くの御著書があります。俳諧誌『太白』を主宰され、向井去来の研究をなさいました。中国の文化に精通され、長崎中国交流史協会長を務められました。このような先生の数々の御功績に対して県民表彰、地域文化功労文部大臣表彰、先生喜寿の年には長崎新聞文化賞が贈られました。

古賀十二郎先生は先生の尊敬してやまなかった長崎学の大先達であります。古賀先生の逝去後発刊された『長崎洋学史』三巻は中西先生が中心となって編纂されたものです。古賀先生のように外国語の文献と和漢の文献を渉猟して仕事をしたいと心がけておられました。

資料を求めての旅が多かった先生は日本各地にその足跡を残したルイス・デアルメイダと戴曼公がお好きでした。彼らのように医師は広く哲学、芸術、宗教に通じ、何よりも人間学に通じていなければなりません。先生は病気を診る

だけでなく病人の心や生き方に目を向けることを心がけておられ、先生の患者さんには先生でなければという方が多かったと同級生の方からお聞きしました。長崎大学での学生の講義や数々の講演の話の起こりが必ずルイス・デアルメイダであったのはそのことを強調されたかったからでしょう。先生のこれまでのご教示とご著書を頼りに、人間性豊かな医師の養成と出島の医学史解明に微力を注ぐ所存です。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。